

子どもを通して大人が繋がる

仲嶺 真弓

10月は、りす組とぞう組の懇談会に参加しました。

りす組の懇談会は、「子どもの様子、大人同士もっと知りあいましょう」というテーマでした。担任が一人ひとりの子どもの話を始めると、保護者の表情がすぐにやわらぐのを感じました。子どもたちの友達関係から、「いつも〇〇ちゃんとは楽しく遊んでもらってます」「そのエピソード知ってます」「こんな時どうしてますか？」などなど、1歳児クラスの懇談会でも、我が子以外の話題の中に他の保護者の声が自然に混ざり合うのは、まさに子どもを通して大人が繋がっていきける光景そのものでした。テーマの2つ目は、参加した大人がそれぞれの24時間生活を円グラフで共有。日々忙しく子育てと仕事の両立に追われる中、いろんな生活の形があることに、共感したり、驚いたり、なるほどと思えたり。人それぞれ違うからこそ、いろんな生活があり、その違いを知ること、自分では思いつかない考えと出会ったり、悩んでいたのは自分だけじゃなかったのだとふと心が軽くなる瞬間と出会えたり。懇談会は大人同士の育ち合いの場でもあります。

ぞう組の懇談会は、15日に晴天の中無事終わることができた運動会の感想を共有する時間でした。今年の運動会も子ども達ひとり一人にドラマがあり、そのドラマを通してそれぞれの保護者が感じたことを語り合いました。保護者ひとり一人の感想を聞きながら、あの日の感動が蘇り、再び心躍る時間でした。ぞう組の懇談会でも、我が子の話はもちろんのことですが、友達同士の何気ないやり取りの場面を見て感動したという話題が盛りだくさん聞かれました。「〇〇ちゃんの昨年4歳児の時の姿を思い出し、今年はどんな姿を見せてくれるのか期待していた。期待は裏切られることなく今年も感動した。」「どの子ども、畳登りに向かうスタート地点の真剣な表情が感動的だった。」「運動会当日よりも、日が経っていろんな人から動画や写真をもらいそれを見る内に、たくさんの大人に見守られていたんだと思ったら当日よりも感動した。」「できなくても、自分で決めたことを最後までやり通していた。失敗してもいいんやでっておかなちゃん（担任）が言ってたと話す我が子は、スッキリした表情だった。」など。感想は子どもたちのことだけでなく、担任にも「10年前の姿とは違い成長したなあ。」と。担任をほろりと泣かせてくれた感想に、職員のことも見えてくれたのだと胸が熱くなりました。

毎年運動会に込めた思いを伝え続けてきました。「アトム共同福祉会の運動会は、“できる、できない”ということに重きを置くのではなく、“できたこともできなかったことも、子どもたち自身が心で何を感じたかが一番大事”と考えています。できた心地よさも、できなかった悔しさも次の瞬間を生きる力に変えてほしいと思いながら、職員は日々子どもたちを見守っています。」その思いをどの保護者も理解し、運動会後の子どもたちと話してくれている様子が、保護者の感想から垣間見られ嬉しく思いました。

懇談会は、保護者と保護者、園と保護者がつながり合える場です。子どもの保育園での生活「日常」を知ってもらうことが保護者の安心につながると思っています。それは保護者と保育者の日々の思いも伝えます。日々の個別のやり取り（日報など）や、懇談会という場と時間を他の保護者と共有することは、大人同士がつながるきっかけの一つになります。子どものことを通して、保護者、職員が互いの思いを出しあい、その時に必要なことを共に考え合える保育園でありたいです。

つばさのしおりには、冒頭に保護者と保育士との関係について、「預ける側」「預かる側」という関係を越えて、子育てをする仲間にと書かれています。今回の語る会、その後のことも含め保護者と職員との関係を深く考えさせられるものでした。そんなときに「託児と保育を考える」という記事に出会いました。つばさのしおりの巻末（運動会写真手前）に、「託児と保育を考える」の記事の全文をつけました。2005年に発表された文ですが、同年は埼玉県上尾市の保育園で起こった園児の死亡事故が全国にショックを与えた年であり、著者の西川さん自身、同じ上尾市で保育所に子どもを預ける保護者のひとりでもありました。興味のある方は、ぜひお読みください。